

日本郵船株式会社編纂『海の俳句集』(1940年)を巡る一考察 内田百聞との関係に於て

合田浩之

A Study of "Haiku of the Sea" (1940) compiled by Nippon Yusen Kabushiki Kaisha
In relation to Hyakken Uchida

Hiroyuki GODA

Abstract

Haiku poems about the sea have long been considered rare. *Nippon Yusen Kabushiki Kaisha Ltd (NYK Line)* had compiled "Umi no Haiku Shu – (Haiku of the Sea)" in 1940. *Hyakken Uchida* (1889-1971) had played a central role in the compilation, with many people associated with the haiku magazine "Tbuen," of which *Hyakken* was also a member. "Haiku of the Sea" also includes not a few haiku poems by those who had been associated with "Touen."

Hyakken Uchida had been appointed as a contract writer for the company (April 1939–November 1945) as the suggestion of the president of *NYK Line*, *Noboru Otani* (1874-1955). President *Otani* demanded harmony and unity from all company management and employees. This was because under the previous management, there was animosity between management and employees, and conflict between employees themselves.

One of the means of achieving this president's desire was through the activities of the *Sangyo Hokoku Kai* – (the Industrial Organization Serving the Nation), which had been strongly recommended by the Japanese Government at that time. *NYK*'s activities of the *Yusen Kaiun Hokoku Kai* – *NYK* Shipping industrial Organization Serving the Nation - had included the publication of a company newsletter ("Kaiun Hokoku" – Shipping serving the Nation -). "Kaiun Hokoku" contained contributions from cultural figures connected to *Hyakken Uchida*, as well as contributions and serial articles of haiku by *Hyakken* himself. The haiku-related articles in "Kaiun Hokoku" were written not only by *Hyakken* but also by people associated with "Tbuen". Among these people (haiku poets) was *Kokyo Murayama* (1909-1986), who was a sort of private secretary to a *Hyakken Uchida* and had been promoted to a full-time employee of *NYK Line* on *Hyakken*'s recommendation. *Kokyo Murayama* had influenced some postwar employees of *NYK Line* in the field of haiku poetry.

Keywords: Haiku of the Sea, Hyakken Uchida, Nippon Yusen Kabuhiki-Kaisha Ltd. Cruise ships Culture

緒言

海を詠んだ俳句の数的な乏しさについて、過去から今に至る迄、俳人達は指摘を重ねてきた¹⁾。

他方、日本郵船株式会社²⁾（船客課）は、昭和15（1940）年に皇紀2600年を奉賀して、『海の俳句集』を編纂、刊行したことがある。この『海の俳句集』は、刊行当時に現役だった俳人から一定の評価を得ていた³⁾。

このような海に限定した俳句集は、後に全日本海員組合『海員句集』全日本海員組合（1960年）が刊行されたに

とどまる。これは、組合の機関誌『海員』創刊10周年（1949年9月創刊）を記念して、同誌に連載された「海員俳壇」に選ばれた句から石田波郷が更に厳選して採録したものである⁴⁾。

こうして考えると、日本郵船が編纂した『海の俳句集』は現時点では日本文学史上において一定の意味を持つと思量できよう。

この『海の俳句集』の編纂に限らず、日本郵船は俳句との浅からぬ関係を持ったことがあった。それは、具体的には、旅客船の船客としての俳人の旅客運送の引き受け⁵⁾

と、その海上従業員の俳人による接遇⁶⁾。俳句の素養を持つ文人（内田百閒）の嘱託委嘱、会社が公認したクラブ活動の一環としての従業員の作句である。

以下、本稿では、日本郵船株式会社編纂『海の俳句集』（1940年）と同時代の同社嘱託社員内田百閒との関係について考察するものとする。

I 日本郵船従業員の作句 ー『海運報国』と俳句

日本郵船の従業員の中にも作句を嗜む者が少なからずおり、そのような従業員達は、「郵船俳句班」を組織、それは会社の正式な従業員のクラブ活動の一つとして公式に位置付けられており⁷⁾、比較的最近まで活動を続けてきた。日本郵船の従業員のクラブ活動は、日本郵船に産業報国会が設置されていた時期（昭和14（1939）年～昭和20（1945）年）は、産業報国会の活動の中に位置付けられていた。

（1）郵船海運報国会

日本郵船は、「郵船海運報国会」と称する産業報国会を、昭和14（1939）年1月16日に設立した。会長は、同社の当時の社長である大谷登（社長在任：昭和10（1935）年11月19日～昭和17（1942）年4月10日）である⁸⁾。同社による内田百閒の文章指南を職務とする嘱託委嘱（これは大谷の発案であるとされる。）の開始が、昭和14（1939）年4月20日であったこと⁹⁾は、注意を要すると筆者は考える。内田百閒と日本郵船の関係は後述する（II）。

さて各社に設立された産業報国会は、戦後、企業別労働組合に改組されていくものであるが、設立当時は、経営者・従業員が相互に融和して、一体となって（裏を返せば、従業員が社会主義思想に共鳴して、労使紛争を起こさないように）、当時の日本政府が各企業に求めていた「生産力の拡充」を実現していくことを目的とした団体であった。日本政府の政策がどうであれ、日本郵船の企業内組織であるところの郵船海陸報国会は、経営者・海陸従業員が相互に融和・一体となるということを目的に対する手段として時宜にかなった存在であったと考えられる。

大谷登は、日本郵船株式会社の社長としては、大正13（1924）年10月15日に伊東米治郎が退任して以来、11年1ヶ月ぶりの同社生え抜きの社長である。その11年1ヶ月は、2人の社長が歴任したが、日本郵船株式会社の従業員から登用された社長ではなかった（白仁武：前職、官営八幡製鉄所長官、各務鎌吉：前職、東京海上火災保険株式会社会長）。要するに、この社外取締役による社長就任が連續したことは、同社の経営状況が異常だったこと、大谷の社長就任は、経営状態が正常化したことを意味するものと解釈される。

経営の異常事態とは、従業員（陸上従業員と海上従業

員）の内部対立、取締役間の内部対立（大株主の意向を重視する取締役と専門経営者である取締役）の発生であり、赤字決算（昭和5（1930）～昭和6（1931）年度）の発生であった¹⁰⁾。

大谷登については、特に回顧録を残して居らず、日本郵船の歴代の社史においても、特に大谷の心情を叙述しているわけではないから、多くの経営意思決定については、現時点では推測するしかないが¹¹⁾、大谷が社長として、経営者・陸海従業員の融和・協調を強く志向したであろうことは、想像に難くないし、実際、大谷に経営者・従業員は心服し社内的一体化が実現したと考えられる¹²⁾。

（2）機関誌『海運報国』

郵船海運報国会では、月刊の機関誌『海運報国』を刊行していた。『海運報国』は、経営者による従業員への訓示や会社の経営方針の説明記事、時局に関する関係者による解説記事などが掲載される中で、従業員のための教養講座的な記事、従業員の親睦のためのクラブ活動（後に述べる俳句班の活動もその一つ）や従業員の私生活上の近況報告記事までもが掲載され、いわば今日における事実上の「社内報」に該当するものとして刊行されていた。

そして『海運報国』には、毎号、文化人（内田百間に縁故のある者が少なからず含まれる。）による随筆の寄稿もなされていた¹³⁾。従って、文芸誌としての意義も存在したことが指摘されている¹⁴⁾。

それゆえ『海運報国』には、俳句に関する記事が連載されていた。

一つには、従業員の親睦のためのクラブ活動の一である俳句班の活動に関する記事である。会社の施設で毎月一度会を開かれていた、郵船俳句班の句会において互選された従業員の俳句が掲載されていた。この郵船俳句班の句会には、日本郵船の嘱託であった内田百閒や、百閒の俳句の師であった志田素琴（本名：義秀）¹⁵⁾、素琴が主宰していた俳誌『東炎』の編集に関与していた俳人で、百閒の推薦で日本郵船の従業員となった大橋古日¹⁶⁾、村山古郷（後述IV）も参加¹⁷⁾、その句作も「海運報国」に掲載されていた。

内田百閒は、旧制第六高等学校の学生時代、旧制第六高等学校教授として赴任した志田素琴に師事し、盛んに作句を行なった。上京後は、暫く句作から遠ざかるものの、昭和9（1934）年に志田素琴が主宰する俳句雑誌『東炎』へ、その編集者であった村山古郷（本名：正三）から寄稿を依頼されたことを契機として、句作を再開する。

今一つ、郵船俳句班の活動以外には、志田素琴が選者として（郵船俳句班への所属に関わらず）全従業員からの投句から選ばれた句を掲載する「郵船俳壇」の記事と、志田素琴による俳句の鑑賞講座の記事が、連載されていた。

II 内田百閒への日本郵船による嘱託委嘱

内田百閒（本名：営造）は、昭和14（1939）年4月20日¹⁸⁾から、昭和20（1945）年11月30日¹⁹⁾まで、日本郵船株式会社から嘱託を委嘱されていた。その職務は、社内文書の添削指導ということで文章指南ということであった。

文章指南のために嘱託従業員を起用することについては、その当時の同社代表取締役社長の大谷登の発案であるといわれている²⁰⁾。文章指南の範囲は、日本郵船単体に限らず、国策会社である南洋海運株式会社（1935年設立。日本郵船からも出資があり、経営者の派遣があった。戦後、日本郵船傘下の東京船舶株式会社として再出発、平成22（2010）年に日本郵船に統合）の文書にも及んだ²¹⁾。

後年の日本郵船社長・有吉義弥（社長在任：昭和40（1965）—昭和56（1971）年）はいう。「郵船は明治以来の古い会社だったので、往復の文書はもちろん、メモや電信まで漢文調がいいとされました。有名な内田百閒さんが郵船の嘱託におられたのも、社員に文章を教えるためだったのですから、古典的な文語体が好まれていたということがおわかりでしょう。」²²⁾

もっとも、対米開戦前までのその頃は、日本郵船株式会社は、欧州航路・北米航路向けの新造客船を次々と竣工させており、その新造船の広告宣伝文書（例：「新田丸問答」²³⁾の作成や、新造船の朝野の名士に対するお披露目の儀式における来賓への接遇といったこと、更には、に關係する文書作成、日本海事新聞への寄稿といったことも、内田百閒は、日本郵船株式会社の起用する広告宣伝塔（今風の言葉でいえばインフルエンサー）としての活躍も「文章指南とは別途」期待されていたと解すべきであり、その期待には内田百閒は、応えていたと判断することができよう²⁴⁾。

それでは、日本郵船株式会社が、内田百閒に求めていたものが、社内文書の添削指導・その客船営業に関する広告宣伝活動だけにとどまったのか、という問題が残る。結論を先に言えば、求めた事項は、「それ以外」にもあり、その「それ以外」のことに、俳句一『海の俳句集』の編纂に關係する事項²⁵⁾が含まれると、私は考える²⁶⁾。

III 海の俳句集

日本郵船株式会社（船客課）は、皇紀2600年を祝して『海の俳句集』を昭和15（1940）年10月30日に編纂・刊行した。その採録は巻末の編纂覚書には「千句」とあるが、実際に数えると998句である。内閣主催の紀元二千六百年式典が挙行されたのは11月10日であるから、その前には刊行されたと考えられる。

巻頭に当時の日本郵船の代表取締役社長の大谷登名義で「序 紀元二千六百年奉賀の記念として本書を江湖大方の

梧前に薦める。四面環海の我国にありては湖騒の響浪風の声すべて我等の詩であり歌であり又俳諧である。ここに古人今人の海と浪にちなむ舒懐を集めて板刻し一は以て国民海事思想の普及に一助の功を效さん事を冀願し亦以て七つの海に海運報國の航跡を引いて休む事を知らぬ我が社感概の一端としたい。掌握の此冊子頃者聞くところの海洋文学振興に一株のみをつくしとなる事を得ば幸甚である。紀元二千六百年新秋」とあるが、この種の文章を社長自ら起草することは、考えがたい。興味深いことに、この文章は、ほぼ同時に刊行された日本郵船株式会社船客課『海の和歌集』日本郵船株式会社船客課（1940年）と同一である。

加えて、巻末の編纂覚書においては、「数限りない古往来の俳句を見盡くすといふ事は、終生の大業である。本集は仮に渉獵の範囲を一定の限度に止めて、敢へて或は滄海の遺珠を割愛した。補訂は今後の機会に待つ事にする。昭和十五年新秋編者識（『海の俳句集』覚書2頁）』『海の和歌集』（覚書2頁にも、俳句と和歌と変えただけの同一文言からなる文章が記載されている。

これらは、文章指南として嘱託を委嘱されていた内田百閒の文章と推測出来るのではないか。

この冊子の装幀は、津田青楓（明治13（1880）年—昭和53（1978）年、画家。夏目漱石門下）²⁷⁾が手がけている。津田の起用については、内田百閒の日記（昭和15（1940）年10月7日）に、「午后、船客課窪田同道、自動車にて荻窪の津田青楓氏を訪ひ、海の俳句集の装釦を頼み、承諾を得て」とある²⁸⁾。内田百閒も漱石門下の文学者であったことを考えると、これは、『海の俳句集』の編纂も、内田百閒が委嘱されていた、と考えられないだろうか。

この津田の起用に先立ち、内田百閒の日記（昭和15年6月29日）に、「午後、村山来。海の歌集、句集の件也。船客松尾氏と相談す。」²⁹⁾とあることからも、如上の仮説は裏付けの一つとなろう。また、海の俳句集が刊行された後の同日記（昭和15年12月12日）には、「午後、村山貞子さん来。海の和歌集、海の俳句集の編纂料千圓の内の残額七百五十圓を船客課より受け取つて渡した³⁰⁾。」ともある。

村山貞子は、村山古郷の妻である。日本郵船から編纂料を受け取ったということは、内田百閒が編纂を委嘱され、その指揮を執ったということであろう。村山貞子に下払いしたということは、少なくとも村山古郷は、内田百閒の指揮の下で編纂実務に関与したということを意味する。

『海の俳句集』には、俳誌『東炎』（月刊：昭和7（1932）年11月—昭和19（1944）年9月）の編集に関与した志田素琴8句・大森桐明10句・内藤吐天33句・大橋古日5句・村山古郷14句の合計70句が掲載されている。『東炎』に文章を寄稿ないし俳句の投稿をしていた内田百閒10句・土井啼花3句・村山葵郷（古郷の兄）13句・篠原句瑠璃4句・石原映水9句・村山たか女（古郷の姉）10句の掲載があるから、『東炎』関係者の句は、累計119句（全体の11.9%）選ばれていることになる³¹⁾。なお、内藤吐天は、大須賀乙

字に師事していたことがある。乙字についても 14 句掲載があり、これを含めれば累計 133 句 (13.3%) となる。

この数字をどう評価するか。『海の俳句集』には、正岡子規 12 句 (1.2%)、当時の主なる俳人として高濱虚子 18 句 (1.8%)・河東碧梧桐と水原秋桜子が共に 22 句 (2.2%)、そして山口誓子 33 句 (3.3%) が掲載されているところをみると、『東炎』関係者による句の掲載数が、やや多めといえるのではないか。

いずれにしても、『海の俳句集』は俳人としての内田百閒及び『東炎』関係者による編纂と結論づけることができるのではないか。

IV 村山古郷

村山古郷は、『海の俳句集』が編纂されていた頃は、志田素琴に師事していたから、内田百閒と村山は、俳句において志田素琴の兄弟弟子ということになる。

内田百閒の『東炎』への参加後、二人の関係は親密になり、村山古郷は、内田百閒の「事実上の秘書」のような存在となる。内田百閒が日本郵船の嘱託となった後も、その関係は続き、村山古郷は、内田百閒の推挙により昭和 16 (1941) 年 4 月 1 日、日本郵船の正規雇用の従業員となつた³²⁾。

そして昭和 17 (1942) 年 11 月に『少国民の為の俳句の本』(青山出版社) を刊行する。その著の「俳句の鑑賞」の章に「現代俳句」と題する節を設けて、伊藤駿児の詠んだ「明月や太平洋の渡し守」を紹介した (179 頁)。

「作者は、郵船会社の船長として、桑港航路に海国日本の使命を負うて活躍した人、日本が誇る新造新田丸の船橋に立つて、太平洋を幾度も往来した船長であります。」(同)

「日本は海国です。海を知り、海に親しまねばなりません。将来の日本人は、この船長の如く太平洋を沼か湖のごとく親しく、気安く考へて海外に発展しなくてはなりません。」(180 頁) と記している。村山古郷も、少なくとも終戦前までは、インフルエンサーとしての内田百閒の側面を承継していたかにも見える。

V 内田百閒・村山古郷以降

内田百閒は、昭和 20 (1945) 年 11 月末日を以て、日本郵船から嘱託を解かれた。その理由は、日本郵船が一般的には氷川丸を除く殆どの客船の戦禍による喪失を被ったこと、戦時補償をうけられなかつたが故の経営難への直面したことといった風に受け取られがちではあるが³³⁾、戦後の日本郵船の社内文書の口語化といった事情もあると筆者は考える³⁴⁾。なんとなれば、日本郵船は、氷川丸の北米航路からの退役 (昭和 35 (1960) 年) までは、国際的な客船運航の再興を模索し続けていたからである。いずれにしても、内田百閒の日本郵船における文章指南、俳句での

関与の時代は終焉を迎えた。

村山古郷は、55 歳の昭和 39 (1964) 年に日本郵船の定年を迎える³⁵⁾。しかし再雇用されたようで、昭和 48

(1973) 年 3 月まで日本郵船に在籍³⁶⁾、その後も日本郵船の不動産管理を目的とする関係会社であった旧郵船興業株式会社に在籍しながら³⁷⁾、日本郵船との間は、総務部が管掌する非常勤の嘱託を委嘱されていた³⁸⁾。嘱託された事項は詳らかではないが、少なくとも戦前の内田百閒が委嘱された事項とは異なることは間違いないであろう。村山古郷が戦後の著作物で語る日本郵船の事項は、内田百閒の回顧と、戦前の社船への俳人の乗船、そして自身の作句に殆ど限られており、日本郵船の広告宣伝的なものはまったく見受けられない。

「数限りない古往今來の俳句を見盡くすといふ事は、終生の大業である。本集は仮に渉獵の範囲を一定の限度に止めて、敢へて或は滄海の遺珠を割愛した。補訂は今後の機会に待つ事にする」とされた『海の俳句集』の補訂・続編の刊行は、今日に至るまで遂になされなかつた。村山古郷には、『明治俳壇史』角川書店 (1978 年)『大正俳壇史』角川書店 (1980 年)『昭和俳壇史』角川書店 (1985 年) の著書もあり、俳句の様々な文献を渉獵していたという点では、その編纂の力量という点では、問題がなかつたと見受けられるのだが。

日本郵船には、郵船俳句班と名乗る現役従業員の課外での親睦クラブが、平成 12 (2000) 年 3 月頃まで存在しており³⁹⁾、親睦クラブの多くは、定年退職を迎えた従業員の参加も容認していたから、村山は、おそらくその逝去

(昭和 61 (1986) 年 8 月 1 日) の直前まで俳句班の例会に参加、郵船従業員の俳句を指導していたと考えられる。ゆえに日本郵船株式会社の従業員で句集を刊行するに至つた者も現れた⁴⁰⁾。ただし、村山逝去後に本格的な俳人となった従業員は現れなかつたから、村山の薰陶を受けた従業員の退職とともに、日本郵船株式会社における従業員の作句は衰退、消滅するに至つた⁴¹⁾。

終わりに

加藤周一は、明治 20 年頃 (明治維新以降の日本社会の西欧化が一通り落ち着いた時期) に成人に達した文学者が、西洋に触れて西洋文化を日本文化のそれと対比して考える手段として、「日本郵船型」(実際に洋行して西洋文化と対峙する。) と「丸善型」(洋書を自ら紐解くことで西洋文化と対峙する。) があつたと提唱する⁴²⁾。

戦前の (特に欧州航路の) 客船は、「旅立ちの日から異文化体験がスタートし」「一ヶ月半、時代によっては四ヶ月もかけて旅行者は旅の意味を反芻する」⁴³⁾ 文化空間であった。このことは、戦前期の一定の年齢層の人々には国民の常識といえたのではないか。文部省『小學國語讀本：尋常科用 卷 11』(昭和 13 (1938) 年) には、「第二十二

欧洲航路」(137-154頁)を学ぶことが求められたのだから。

戦前の日本郵船の客船事業を、クルーズ船事業という形で事実上象形する郵船クルーズ株式会社は、公益社団法人日本工芸会との連携によって、その運航客船を日本文化発信の場と位置付けてもいる⁴³⁾。令和7(2025)年7月20日に就航した新造船・飛鳥Ⅲの公室にはヒストリアエリアと呼ぶ日本郵船の各船の歴史を追憶する空間さえあり、そこには高濱虚子『渡仏日記』や内田百閒の著作群も展示されていたことを筆者は目の当たりにした。

…何れの日にか、『海の俳句集』の第二集が生み出されることもあるのだろうか。

(了)

註1) 古くは戦前に、岩田九郎が『俳句研究』(改造社刊行で1944年に11巻7号を以て廃刊となったもの)1巻1号(昭和9年3月)から7巻12号(昭和15年12月)まで収録された約5万句のうち海(海洋、海洋を背景として景色や生活を詠ったもの)の俳句は、650句に過ぎず、2%未満と指摘している(岩田九郎「海洋と現代文学」『国文学;解釈と鑑賞』6巻6号(通巻61号)1941年6月、133-134頁)。

また、中村草田男も高濱虚子が還暦を記念して刊行した『五百句』のうち、海にとも縁のある句は12句のみと指摘した(中村草田男「寥々たる海洋の俳句」『国文学;解釈と鑑賞』6巻6号(通巻61号)1941年6月、153頁)。

戦後も村山古郷が海の俳句の数の上での乏しさを指摘している(村山古郷「海の俳句、船の俳句」『コンテナリゼーション』35号(1971年)39頁)。

現代においても、「海の俳句については、海は山よりもはるかに大きく、かつ、季語の数も山の季語に比べてはるかに多く、例句も多いのに、かつて『海洋俳句』などという言葉は聞いたこともないし、『海の俳句歳時記』というのも出版されていない。このことも、今回私が『海の俳句歳時記』をまとめてみようと思い立った動機の一つである。」という発言がある(高橋悦男編『海の俳句歳時記』社会思想社(1998年)4頁(まえがき))。

ただし、岩田も中村も昭和戦前において海洋俳句として秀句を数多く詠んだ同時代の俳人(特に山口誓子)とその作品の存在を指摘している。中村は、同時代において「海洋の魅力を痛感し其分野の作品の開拓を企画し実践しているのは唯一の例外」として山口誓子を激賞する

(中村前掲、154頁)山口誓子については、生前1200句程度の海の句を作句したという指摘もある(庄中健吉「誓子山脈の人の愛誦句 海の俳句」『俳句研究』60巻5号(1993年)78頁)。

そして、今日では、海の俳句を詠む人が少なくないといえるのではないか。大野雑草子『俳句用語用例小事典』(海の俳句を詠むために)博友社(1989年)という用例集(歳

時記ではない。)が、存在している。

いずれにしても、繰り返し指摘されてきた「海の俳句の乏しさ」という論点は、重要であると筆者は認識しており、その考察は別項に委ねる。

註2) 以下、本稿では日本郵船と略称する。また、本稿では各種引用において、歴史的仮名遣いはそのままとするも、固有名詞以外は、原則、旧字体は新字体に、異体字は正字に置き換えた。もっとも、内田百閒については、百閒と表記して著述がつくられる場合があり、その場合は当該著述の記載に倣った。

註3) 中村・前掲注1、151頁

註4) 日本海員組合『海員句集』全日本海員組合(1960年)

「後記」146頁「あとがき」150頁。

なお、石田波郷主宰の俳誌「鶴」には、昭和30(1955)年から村山古郷が同人となり、この海員句集の印刷を手がけたのは、当時、日本郵船の子会社であった大洋印刷産業株式会社(昭和21(1946)年設立。平成22(2010)年に株式会社プレシーズに統合され、その営業所は、今でも日本郵船の本店ビルに存在するが、現在では日本郵船の資本は投じられていない。)による。

註5) 一般の船客としての俳人の乗船事例については、その文学史上、意義のあるものに限れば、住友合資会社の従業員であった山口誓子の日本郵船扶桑丸による満州渡航(昭和9(1934)年11月7日神戸港出帆)である(村山古郷「満州朝鮮吟」『昭和俳壇史』角川書店(1985年)所収166-167頁)。これは出張、業務渡航ではあったものの個人としての山口誓子にとっては吟行でもあり、その産物である句集『黄旗』龍星閣(1935年)は、近代俳句の発展に大きな影響を与えたとされる(同168頁)。『黄旗』の「季節風」の章には、船中第二日、船中第三日、船中第四日と前書きされた句がそれぞれ、3句・7句・3句収められている(山口誓子『黄旗』龍星閣(1935年)3-8頁。例えば冒頭の句として「玄海の多浪を大と見て寝ねき」とある(3頁。))。

註6) 欧州航路の貨客船「箱根丸」(昭和11(1936)年2月16日横浜出帆)には、渡仏する高浜虚子が乗船したことがあり、洋上(箱根丸の機関長の公室)にて句会が開かれた(村山古郷「洋上句会」『昭和俳壇史』角川書店(1985年)所収186-187頁)。虚子の航海には、俳句を嗜む同船の上ノ畠楠窓(アララギ会員。本名、純一)機関長が会社の指示により接待役として伺候した(同上、179頁)

俳人としての船客に対して接待役が社名で公式に指名された事例は、管見の限りではこの事例だけであり、日本郵船の歴史としても特筆されるべき出来事として認識されている(日本郵船歴史博物館『昭和11年 欧州への船旅-高浜虚子『渡仏日記』より(日本郵船創立120周年記念企画展)』(2005年)※企画展図録)。

註7) 日本郵船による従業員のクラブ活動の公認は、明治29(1896)年7月の二曳俱楽部の開設に遡り、その後名称

の変更などを繰り返し、現在の二引会（文化班・運動班）となつたのは、昭和 25（1950）年のことである（日本郵船株式会社『日本郵船株式会社七十年史』日本郵船株式会社（1956 年）569–571 頁）。

註 8) 日本郵船株式会社・前掲注 7, 727 頁。

註 9) 内田百閒『百鬼園 戦前・戦中日記 上』慶應義塾大学出版会（2019 年）275 頁。

註 10) このことについては、日本郵船株式会社の歴代の社史（日本郵船株式会社・前掲注 7），日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』日本郵船株式会社（1988 年）は、欠損金の発生以外の記載を全く欠く。慶應義塾大学大学院経営管理研究科（ビジネススクール）では、院生の議論のたたき台となる事例集（「ケースブック」と称する。）をとりまとめている（執筆者不詳『第一次大戦後における日本郵船の「失敗』』（商品番号 KBSP-00705）慶應義塾大学ビジネススクール（2002 年））。本稿では、これに依拠した。

註 11) 大谷の次に社長に就任した寺井久信の評伝には、大谷について「綿密な事務家」という評価が記載されている（日本郵船株式会社内 寺井久信伝記編纂委員会『寺井久信』（1965 年）65 頁）。

註 12) 同時代の海運人からは、以下のよう評価がなされている。「日本郵船の同時代人としては、大谷登と清水安治の両氏を語らねばなるまい。大谷氏は社員重役から社長に上がつた人で、これといった逸話がない。逸話がないほど、生真面目な、仕事一途に進んできた人一」ということができようか。氏が認められたのはカルカッタ支店長時代であらう。それからトントン拍子で社長になつた。戦時中には船舶運営会の初代総裁に就任し、各社のよりすぐつた猛者を部下にもつたわけだが、この豪傑達も大谷氏の人柄には心服し、氏もまた豪傑連を大いに愛したものであつた。」（野村治一良「大谷登と清水安治』『わが海運六十年』国際海運新聞社（1955 年）220 頁）

註 13) 『海運報國』に掲載された隨筆（内田百間に関係する人物（知人・友人）に限る）は以下の通り。

・辰野隆「こどもの世界」（児童文学）1 月号 76-77 頁

・宮城道雄「海」（隨筆）2 月号 56-59 頁

・内田百閒「夢獅山隨筆」1 月号 78-80 頁「(七) お正月」，4 月号 58-60 頁「(八) 屏東の蛮屋」，5 月号 50-52 頁「(九) 新田丸座談会覚書」，7 月号 66-68 頁「(十) 簾戸」，8 月号 64-66 頁「(十一) 流民」，9 月号 66-68 頁「(十二) 門司の八幡丸」，11 月号 60-62 頁「(十三) 尾長」

註 14) 例えば、日本郵船歴史博物館は、令和 4（2022）年 5 月 21 日から 9 月 25 日まで、企画展「郵船文芸譚 一機閣誌『海運報國』をひもとく」を開催した。

https://museum.nyk.com/exhibition_archive/exhibition_2022_05.html (2025 年 8 月 27 日アクセス) その図録が刊行されていないのは遺憾なことである。

註 15) 志田は『海運報國』が刊行されていた頃は、旧制成蹊高校教授であり、その少し前の大正 15（1926）年から昭

和 12（1937）年まで、また昭和 14（1939）年・昭和 16（1941）年に東京帝大文学部国文科で「俳諧史」を講じた。井本農一「志田義秀先生の業績」『国文学：解釈と鑑賞』16 卷 12 号（1951 年 12 月）34–36 頁。

註 16) 内田百閒・前掲注 9 の昭和 15（1940）年 1 月 15 日の条に「大橋来。大橋の郵船入社きまるらし。」とある（352 頁）。戦後のある時期まで日本郵船の従業員（船客課勤務）であったことはわかっているが（平山三郎「『けぶりか浪か』雑記」内田百閒『けぶりか浪か』旺文社（1983 年）所収，302 頁），詳しいことはよくわかっていない（「第十二話 消えゆく俳人、大橋古日」『百間外伝 これくん風到来』中央公論新社（2024 年）所収 229–251 頁）。

註 17) 「素琴先生来。（中略）一緒に郵船社員俱楽部の郵船俳句会へ行く。村山も来会す」内田百閒・前掲注 9, 332 頁（昭和 14（1939）年 11 月 2 日（木曜日）の条），「大橋氏が同道 そのあと俱楽部で夕食」内田百閒『百鬼園 戦前・戦中日記 下』慶應義塾大学出版会（2019 年）30 頁（昭和 15（1940）年 9 月 18 日（水曜日）の条）

註 18) 内田百閒・前掲注 9, 275 頁。

註 19) 内田百閒『百鬼園 戦後日記 I』中央公論新社（2019 年）70 頁。

註 20) 村山古郷「百間先生追憶記」『百間先生の面会日』角川書店（1980 年）110 頁（初出は、「俳句」24 卷 7 号（1975 年 7 月）190–201 頁）。もっとも、大谷の意を受けて文章指南の嘱託について人選し（フランス文学者・辰野隆博士と相談、辰野の推薦により），内田百閒と定めて、内差百間に接したのは、総務部庶務課小倉剛一氏であった（同）。

なお、この文章中、百閒の作品として「八幡丸問答」を挙げているが（115 頁），「新田丸問答」の誤りである。

註 21) 内田百閒・前掲注 17, 328 頁（昭和 19（1944）年 10 月 24 日の条）。

註 22) 有吉義弥『海運五十年』日本海事新聞社（1975）57 頁。

註 23) 日本郵船株式会社船客課（昭和 15（1940）年 4 月 7 日）。内田百閒『けぶりか浪か』旺文社（1983 年）269–283 頁所収

註 24) 山本有香「内田百閒の日本郵船時代」『内田百閒研究—一九三〇年代から一九五〇年代の作品を中心に—』2023 年（早稲田大学博士学位請求論文）所収 87-88 頁。山本は、内田百閒の台湾への紀行文「屏東の蕃屋」について、その植民主義の匂いを嗅ぎ取る（同 85 頁）。

もっとも、日本郵船による内地・台湾航路の運営が、日本政府の植民地主義を具現化したものと考えるのは（87 頁），行き過ぎであろう。営利企業が国策に利益追求の機会を見いだし、利潤追求をしていただけと考えるべきであろう。山田桃子は、山本有香同様に、内田百閒が、村山古郷が主張するように、日本郵船の嘱託であったがゆえに、戦時中に文学報国会に参加しないで済んだことで、国策協力がなかった（村山・前掲書註 20, 116 頁）として賞賛的に表現できるのか、という批判的視座を持つが、内田百閒の

台湾紀行文批評において「日本郵船による航路の拡大が(中略)日本の帝国主義的進出や植民地統治によって可能になっている」と述べる(山田桃子「日本郵船嘱託時代」『内田百閒の研究』2018年(北海道大学博士学位請求論文)所収33頁)。それゆえ山田の批判の方が、企業行動を理解した上でのものであり、より説得的である。

註25) 俳句以外のことでは、大谷登社長から個人的に「根付」についてのドイツ語文献の邦訳を依頼された。このことについては、山本一生「根付、天水桶、そして新田丸」山本前掲注16、所収108-114頁。

註26) 山本一生も『海の俳句集』『海の和歌集』への内田百閒の関与、『海の俳句集』の村山古郷の編集への参加を断言する(山本前掲注16、114-115頁)。

註27) 内田百閒・前掲注17、索引兼注(人名)12頁。

註28) 内田百閒・前掲注17、35-36頁。

註29) 内田百閒・前掲注9、399頁。

註30) 内田百閒・前掲注17、56頁

註31) 『海の俳句集』巻末の「編纂覚書」には、参照した諸書が列挙されている。その中には、内田百閒『百鬼園俳句帖』三笠書房(1934年)『百鬼園俳句帖補遺』(これは、

「百鬼園俳句帖拾遺」(『無絃琴』中央公論社(1934年)所収のことではないか。),内藤吐天『落葉松』東炎山房(1935年),志田素琴『山荻』,土井啼花『南風』東炎山房(1935年)大森桐明『高原』東炎山房(1940年)村山たか女(大森桐明編)『桃花帖』桐明居(1929年)が含まれている(出版社、出版年は筆者が補った。)。

村山たか女は1929年に死去しているので、『東炎』同人ではないものの、大森桐明が句集を編纂し、この『海の俳句集』刊行後の昭和17年に改めて東炎山房から句集『桃花帖』が再刊されているから、東炎関係者に数えることはゆるされるだろう。なお、東炎同人には、如上に加えて安孫子荻声・逸見竹石が含まれているが(村山古郷「乙字門流の分裂」『昭和俳壇史』角川書店(1987年)所収130-135頁),この二人の句は『海の俳句集』には見当たらない。

註32) 内田百閒・前掲注17、342頁。

註33) 村山・前掲書註20、117-118頁。

註34) 戦時中は船舶運営会に出向し、同業他社の経営者と共に働いた有吉義弥は、こうもいう。「ところが山下や大同からきた渡辺君や浜田君などは、口語で実に簡潔明りょうな電信を書きます。歯切れのいい口語体の方が目に浮かぶという面で利点があることを知りました。」(有吉義弥・前掲注22、57頁)。

註35) 「葱坊主まだまだ働かねばならぬ」「朝顔よ停年以後の日が過ぎゆく」(村山古郷『村山古郷集(自註現代俳句シリーズ; 第3期36)』俳人協会(1980年)71頁)。

註36) 「職やめてその翌くる日や万愚節」同上、100頁。

註37) 郵船興業の従業員が昭和50(1975)年10月17日に病床にいる村山を見舞っている(村山古郷『練馬の狐』

角川書店(1983年)209頁)。

なお、郵船興業株式会社は昭和29(1954)年設立。現在は、日本郵政株式会社51%, 日本郵船株式会社49%の合弁会社、JPプロパティーズとなっている。

註38) 村山は昭和49(1974)年に「非常勤嘱託出勤の日や菜種梅雨」と詠んだ。前掲注35、109頁。

註39) 平成12(2000)年4月から平成15(2003)年10月まで『日本海事新聞』に、毎月1度「郵船俳句班」の名義で互選句が掲載されていた。これは、「郵船俳句班」に現役の従業員が皆無となり、その活動は退職者だけとなつたから、会社公認の団体になり得なくなり、それまで互選句の掲載誌として「社内報」が使えなくなつたからである。

註40) 例え八木敏子『句集 もやひ舟』丸の内出版(1981年)がある。その他に、町田しげき(明治42(1909)年-,町田しげき『町田しげき集(自註現代俳句シリーズ; 6期42)』俳人協会(1991年))。村山は町田を日本郵船時代の畏友といい、昭和54(1979)年に町田の古希に句を獻じている(村山・前掲注35、151頁)。もっとも町田は、昭和38(1963)年から「濱」同人であり、村山に師事したわけではなさそうである(町田・前掲書、奥付)。

註41) 村山古郷が、旧制国学院大学文学部国文科学生であった頃に、俳句の手ほどきをした同大学予科生に野村濱生(大正11(1922)年-令和4(2022)年)がいる(野村濱生『野村濱生俳句集 峠』佐藤義正(1952年)後記)。野村は、戦後、村山の主催した「べんがら」の同人となり、「べんがら」廃刊後も、神奈川県の県立高校国語科の教職員生活の傍ら作句を続けた。野村の名前「濱生」とは、日本郵船に所属した横濱丸(シアトル・ヴァンクーバー航路)の船上で生まれたが故に、同船の船長によって命名された。日本郵船に縁故のある俳人の系譜と考える余地がなくもないといえようか。

註42) 加藤周一・中村真一郎「西欧・アジア・想像力」『国文学:解釈と教材の研究』25巻7号(1980年6月)59頁、なお加藤は、明治20年代以前の日本の文学者にとっては、西洋は日本の未来であるから、無批判で受け入れる者であり、その人達の文学は江戸時代以来の日本文学であったとし、他方、1920年代になると翻訳でしか西洋文化に触れず、日本の古典文学も読まない文学者(例えば、横光利一)が出現することを日本文学の画期とする(同)。このことは日本の西洋文化の受容という意味では、重要なことと理解するが、筆者の本稿における考察の対象の外にある。

註43) 和田博文『海の上の世界地図-欧州航路紀行史』岩波書店(2016年)279-280頁。

註44) 郵船クルーズ株式会社「日本文化の発信」郵船クルーズ株式会社のウェブサイト

<https://www.asukacruise.co.jp/identity/sustainability/regional/> (2025年8月27日アクセス)

合田 浩之

要旨

海を詠んだ俳句は、古来、数少ないと指摘され続けてきた。日本郵船株式会社は、昭和 15 (1940) 年に『海の俳句集』を編纂した。その編纂には、内田百閒が中心となって、百閒も同人であった俳誌『東炎』の関係者が多く関与し、『海の俳句集』にも『東炎』関係者の俳句が少なからず収められた。

内田百閒は、当時の日本郵船の大谷登社長の発案で、同社の文章指南を職務として嘱託を委嘱された (昭和 14 (1939) 年 4 月 - 昭和 20 (1945) 年 11 月)。大谷は、日本郵船の経営者として、社内の協調・融和・一体化を志向した。その手段の一つが、産業報国会活動である。日本郵船における産業報国会活動の中に、社内報に相当する機関誌 (『海運報国』) の刊行があった。『海運報国』には、内田百閒に縁故のある文化人による寄稿や、百閒自身の寄稿・俳句の連載記事があった。その俳句に関係する記事には、百閒のみならず、『東炎』の関係者によるものが見られた。その関係者 (俳人) の中には、内田百閒の秘書的な存在で、百閒の推挙により日本郵船従業員に登用された村山古郷もいた。

キーワード: 海の俳句集 内田百閒 日本郵船 客船文化